卒業おめでとう！

本日、平成 18 年 3 月 17 日、ここに、保護者の皆様のご臨席を賜り、「平成１７年度学位記授与式」を挙行出来ますことは、東京学芸大学Ａ類学校教育教職員一同にとりまして、この上ない大きな喜びです。*）

A 類学校教育を代表して、一言、ご挨拶を申し上げます。

卒業生の皆さん、皆さんは東京学芸大学教育学部Ａ類学校教育の教育課程を無事修了されました。そして、平成 17 年度東京学芸大学の卒業生として、この学び舎を巣立っていくことになります。

皆さんが今日の晴れの日、外では、今朝静まった風が改めて強く吹き荒れていますが、晴れていますね、まずまず・・。晴れの日・・・・を迎えることが出来たのは、皆様自身の努力はもちろんですが、ここにご臨席の先生方、皆さんの保護者、教育実習でお世話くださった先生方、そして、大学の職員など、皆さんを取り巻く多くの人たちの支えがあったからです。「支えてくれた」方々への「感謝」の心を忘れないで頂きたいと思います。

「支え」と「感謝」といえば、私は、皆さんの多くが入学された 2002 年（平成 14 年）の 9 月に、タイ国はバンコクにあるユネスコ・アジア太平洋地域教育局に Secondment として赴任し、2 年間の「ICT と教育」プロジェクトにかかる「マネージャー」としての任期を終え、2004 年（平成 16 年）８月に帰国しました。この間、ここにご臨席されている学校教育の先生方はもちろん、大学内の多くの教職員、文部科学省の担当官をはじめ、国内外の卒業生や同僚から、いくら感謝しても感謝しきれないほどの、tangible で intangible なお気遣いとご支援をいただきました。

2 年間の赴任の中で、後々の資料にと、毎日、日記と、その日その日に感じたこと、業務事項など、できる限りのメモを、国際協力における「経済のみの支援から真の人材支援」への移行としての初めてといえば初めての試みの記録と、後進の方々のために役立てばこの上ない契機と信じて、作成しておりました。

この「晴れの日」を機会に開いて見てみましたら、・・・もちろん「日記」ですから、仕事がら・・・AV、Audio-Visual ですが、また、さまざまな映像情報化社会で思い浮かべることのできる映像制作や、鑑賞などですが・・・・・、ともあれ、きわめて危ういことも「率直に」書きなぐってあったり、表現されてあったりしているページなど、多々ありますが、・・・赴任して３ヶ月目、1 年目、そして、2 年目も半年を過ぎたころに、「支えられている」「支援されている」「感謝」「ありがたい」などの言葉が、多数、記されています。

赴任当初は、もともと国際協力にかかわって長い月日が経っていましたから、知った方々の多い教育局ではありましたこともあり、今のあなた方、あるいは4年前のあなた方と同じように、極めて純粋にそれでいて崇高で大きな期待と希望をもって、アジア太平洋地域の国々と、そこに暮らす人々のため、日本国、日本国民のため、学芸大学のため、教室及びその構成員のため、そして最後に、自分のため、と、文字通り「突っ走った」ことが、日記から、読み取れます。そして・・・・業務が順調に・・全2年間を通じて順調とはもちろん言い難いのは、4年間を学芸大学、学校教育という組織で過ごされた皆様には、容易に想像できることと思いますが・・・・走り出して3ヶ月目に、業務の遂行方法の観点から、たいそう、ポリティカルな事態が発生し、結局最後まで、これらが業務の遂行に大きな影響と私への豊かな経験・・・と私は思っていますが、を与えることになるのですが、・・・陰に陽に、上記の方々と多くのメールや定期的な恩師からのFaxを含む私的そして公的な文書、そして電話による情報と経験など交換をして、まさに、「支えられている」「ありがたいご指導、ご示唆」、・・・・時には、ご叱責とご忠告などいただいたことがありました。・・・・そして、同じような事態が、極めてストレスフルで緊張関係をもった事態ですが、・・・1年目、そして、帰国間近が見えてくる2年目の後半などに、ありました。

感謝、Many Thanksという、そして、consultation、assistance、そうそう、後方支援ということで、logisticsなども、頻繁に、日記、メモに、見ることができます。

今、ICTつまり情報通信技術の発展によってglobal化が進み、transnationalとかtransborderの中で、国という狭い概念が壊れつつあり、目に見えない狭い社会の競争が顕在化するとともに、国境を越えてのMergeつまり合併による地球的規模の「競争力の強化」と、Qualityつまり「質の向上」と保証が、あらゆる事象に問われています。

と同時に、ESDつまりEducation for Sustainable Development、「持続可能な教育」や社会のために、今後10年間、われわれに何ができるかと問う、多様な研究と実践が、世界あげての課題の一つとなっています。その根幹に流れる考え方は、「価値の理解と共有」です。

皆さんは、これから、大いに「異質な」人、物、金、情報などで溢れている組織、文化、社会に、向かいます。

そこでは、何よりも、こうした「異質な」組織、文化、社会の中での統合と調整を基盤とした「マネージメント」が、問われます。日本は、誤解を恐れずにいえば、これまでホモジーニアスな社会、つまり、「同質な」社会でしたから、この「異質な」社会、文化、組織などの「マネージメント」が、不得意であると、思われております。

こうした変化の激しい「異質な社会、文化、人が統合、融合される」グローバル化されつつある組織、しかし、それでいて indigenous な、あるいは、自分の所属する国、身近な地域社会など Local な社会や組織が、育て発展させてきている歴史、文化、伝統などの根底にあるヒトの智慧と価値の理解と共有を重視する、思考と行動、・・・・。教育の世界、企業の世界のみならず、スポーツも含め、ありとあらゆる世界における、すべての行動と思考の根幹に、

感謝のこころ、支えられている、という心の持ち方が重要。

そんなことを、ほんの一つの例ですが、2 年間のユネスコ勤務で学びました。異質の社会、文化を背負った異なった国々からの専門家で構成され、心を一つにして、世界の教育、科学、文化の発展のために思考し行動する組織と Team の中で、学びました。

ひとつ、はなむけの言葉を、お示ししましょう。それは、

粗にして野だが、卑ではない、

という言葉、生き方、行動の仕方です。
昭和 38 年 5 月国会の運輸委員会冒頭に、三井物産社長から国鉄総裁になった人物、石田禮助が「私は生来きわめて粗野です。卑ではないが粗にして野です」と、発言したことをもとに、城山三郎が彼の著書の表題にした石田の生き様を表した言葉です。

膨大な赤字を抱え、いま言う民営化の先駆けとなった国鉄。

競争と質、そして、異質な構成要素の中での「マネージメント」が問われる組織、つまり、異質な社会、文化、科学、教育の発展の中で、「グローバル化を見据えた大胆なまでの strategic な競争と質の向上のため、そして、それでいてローカルな社会、文化への畏敬と維持及び向上のための緻密な思考と意思決定」が問われるで、
あなた自身の「質」の拡大と深化と「マネージメント力」を高めるために、この 4 年間で得たことを基礎に、「感謝」「支えられている」ことを念頭に思考し行動し意思決定する「あなた」を期待しております。

皆さんがこれからの人生で心身ともに豊かになることを祈って、ご挨拶といたします。

ご清聴、ありがとうございます。

以上

（*）本稿は、平成 18 年 3 月 17 日午後行われた、平成 17 年度東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程学校教育選修学位記授与式における筆者による祝辞の、再録である）